

俳壇

白鳥・鈴木・小林さんに

神野 紗希選

【期間賞】

朽舟を飲み込み猛る野火の舌

(長野市) 白鳥 寛山

【評】野辺に打ち捨てられた

舟が、放たれた火に飲まれ燃えてゆく。「舌」と書くことで、火そのものが命を宿しているよう。舟の水のイメージと、野山を這う火。さらに野火は、枯草を焼き身吹きを促すから、朽ちる舟と再生の野



白鳥寛山さん

火の対比も内包されている。すべてのものはいつか果て、新たなものが生まれくる。その循環を凝視し、世界の真理を劇的な瞬間の描写にこめた。随一の迫力を放つ一句であった。

【次席】

裸木の矜持こそこの樹液音

(長野市) 武田 芳子

【評】冬の季語「裸木」は、葉をすっかり落とし、裸のよう

に剥き出しになった木を指す。まるで枯れたように見える木も、その幹には水が通い、たしかに生きています。その体が大地から吸い上げる樹液の音こそが、裸木の矜持なのだと寿いだ。人間に感知し

今井 聖選

【期間賞】

初燕一田玉の輝けり

(伊那市) 鈴木 秀雄

【評】燕も雀も日常的で我

らの近辺にいるのが当たり前のように思っているが、現代



鈴木秀雄さん

の街の中で野生の動物が人間と共生していることの「奇跡」を思うことはあまりない。一田玉は人間が作った「貨幣」なのに軽んじられている。落ちていても拾われない一田玉をよく目にする。燕が街を飛び交うことへの感謝は一田玉への感謝と同じ。作者はそう言っている。

【次席】

十二月買収される会社の灯

(東御市) 大塚久仁男

【評】会社が買収されること

が必ずしも悲哀をもたらす出来事とは言えない。会社の名前が消えてもそれによって社員が損害を被るとは限らない。買収される側の社員が歓喜する場合も有り得る。しかし、その会社の社名を永年親しく眼にしていた市民が淋し

坊城 俊樹選

【期間賞】

魂は来世に遊ぶ日向ぼし

(松本市) 小林 幸平

【評】これは日常を超えた境地ではなからうか。何しろこ

自身の魂は来世まで飛翔して遊んでおられる。しかも「日向ぼし」といういつもの生活の本質を捉えているようにも思える。この句のポイント



小林幸平さん

さを感じる場合はあるだろう。社屋や見慣れた看板が街の一部となっている場合はおそらくである。

魂が自由自在に行き来すること。つまり俳句そのものが「融通無碍の境地」なのである。俳句とは普段の暮らしに潜むこんな大きな世界をも詠み出せるのである。

【次席】

ふらふらと往きも還りも大宇宙

(飯山市) 田中 琢雄

【評】これまた巨大な光景。フランクの句としても見たこ

とがないような壮大な景色がある。フランクを潜いで頂点に達すると、当然のように逆向きに戻って来る。それはあたかもこの大宇宙を行って還ってきたのと同じなのではないかと気づかれた作者。俳句とは写生が基本だと教えられたが、こんな巨大なユーモアに満ち溢れた句に感服する。